

貸本屋と読書サークルの時代

—— 吉川英治『宮本武蔵』と大衆読者 ——

藤 井 淑 禎

どこでもいいが、比較的古くからある公立図書館で、吉川英治の『宮本武蔵』（東西朝日新聞夕刊、昭和十年八月二十三日～十四年七月十一日。昭和十一年五月～十四年九月刊）を検索し、請求してみると、大雑把に見て二種類の『宮本武蔵』が所蔵されていることがわかる。

全集とか文庫本とかの比較的近年の版は除外して、たとえば昭和四十五年くらいまでの時期に限定してのことだが、なぜか元々の戦前版（元版Ⅱ全六巻、昭和十一～十四。普及版Ⅱ全十巻、昭和十四～十五）を所蔵しているところは少なく、戦後に出た二種類を蔵しているところが多いのである。

その二種類とは、先行して出たコンパクトな廉価版と、昭和三十五年以降に出た大判の豪華版とを指す。前者は、

六興出版社（六興出版部、六興出版と称する時期もあるが、ここでは六興出版社に統一する）が昭和二十四年から翌年にかけて全十巻で刊行したB6判（一八二ミリ×一二八ミリ）のもので、同社は昭和二十八年にも今度は全六巻に再編成してB6判で、さらには同年から翌二十九年にかけて上中下の全三巻にしてB6判よりわずかに大きい縦二〇〇ミリで、と二種の異版を刊行しているが、この二つはそれほど広くは流通しなかったらしい。

同社が出したコンパクトな廉価版で、大きな影響力を持ったのは、昭和三十二年に全六巻、B6判、定価一九〇円で刊行されたシリーズであり、このシリーズは、昭和四十年代、五十年代にも新装版として版を重ね、同社の名物シリーズとなった。

これに対して、大判の豪華版の口火を切ったのは、昭和三十五年に中央公論社から全六巻、A5判(二一〇ミリ×一四八ミリ)、定価三八〇円で刊行されたシリーズである。昭和十年から十四年にかけての新聞連載時の全挿絵(矢野橋村、石井鶴三画)を収録したことを売り物とするこのシリーズは、「全挿画入 愛読愛蔵版」と銘打たれ、布装菊判の豪華さを誇った。

これに続いたのが、昭和三十七年に講談社から定本愛蔵版として全五巻、A5判、定価七〇〇円で刊行されたシリーズである。企画としては競合したにもかかわらず、中央公論社版と講談社版はこのあと何年も共に重版を続け、結果的に宮本武蔵人気の絶大さを証明することになった。

このように振り返ることのできる二種類の『宮本武蔵』だが、大判の豪華版刊行以降もコンパクトな廉価版は生き長らえはしたものの、重版を繰り返すというようなことはなかった。各年の『出版年鑑』を見る限り、昭和三十二年に出た六興出版社版の全六巻が再版されるのは、昭和四十四年のことだったのだから。要するに、『宮本武蔵』の刊行に関しては、コンパクトな廉価版から大判の豪華版へ、という屈折が見られることになる。だとしたら、その背後にある読者や、読書の、実態とはどのようなものであった



中央公論社刊の豪華版と六興出版社刊のコンパクト版(新装版)

のだろうか。あるいは、そこにも、刊行形態の屈折に見合
う何らかの変化があったのだろうか。

*

戦後日本の〈読書〉を牽引してきたのが、図書館を基点
とする読書普及運動と貸本読書であったことは、広く知ら
れている。後者はつねに日蔭者的存在たることを余儀なく
されてきたが、とはいえ、影響力の大きさから見てもこれ
を無視することはできない。

読書普及運動とは、いわゆる不読書層の開拓・啓蒙に集
約されるが、戦後に開始されたそれは決して平たんな道
りではなかった。図書館法の制定は昭和二十五年だが、い
わゆる朝鮮特需による好況にも支えられて一時的な図書館
ブームが生まれ、近代的な図書館の建設、「ブック・モビ
ール」(巡回車)の誕生と、話題には事欠かなかったが、景
気の鎮静化とともに、「読書の普及と指導」という未解決
の課題が改めて浮上してきたというのである(有山崧「読
書運動を展開しよう―民衆の図書館として―」『図書館雜
誌』昭和三十一年九月)。

戦後の読書普及運動が二つの側から進められてきたこと
を、熊本県立図書館長の蒲池止夫は次のように整理してい
る。

戦後日本における読書運動として注目されるのは、ひ
とつは民衆、とくに従来不読書層ともいわれて来た農村
の主婦や労働者たちなどの間に、自主的に生まれて育っ
て来た自己学習やレクリエーションのための読書の動き
と、いまひとつは戦後、新しく地方自治体で設置された
公共図書館の側からの、いわゆる不読書層開拓という形
で行なわれて来た啓蒙運動である。このふたつの運動は、
もっともうまく行った場合には、公共図書館の奉仕活動
の中にその結節点を見出して、注目すべき大衆的な組織
運動となっている。

〔読書を進める社会教育行政―そのあり方―〕『社会
教育』昭和三十八年四月)

蒲池はそれに続けて、「各県の県立図書館が実施してい
るブックモビールによる移動図書館運動」が「市町村の公
民館をその駐車場として、これを媒介として末端の利用者
と結びついている場合が多い」にもかかわらず、図書館に
よる読書普及運動と市町村の公民館を中心とした社会教育
行政とが、十分に連携できていないことを嘆いているが、
第三者から見れば、それは取るに足らない問題だ。

むしろ、昭和三十一年時点で「最近の新しい傾向である

集団読書（組織的、共同学習的）というべき読書サークル運動」（佃実夫「公共図書館運動を民衆のものとするために」『図書館雑誌』昭和三十一年三月）としてその活動が認知されるようになった自主的読書活動を、移動図書館すなわち巡回文庫が支える仕組みが、昭和二十年代後半にはすでに始動していた点にこそ、注目しなくてはならない（前掲有山崧論参照）。

『図書館雑誌』昭和三十一年五月号に掲げられた各図書館に対するアンケート特集「貸本屋をどう見るか」は、直接には貸本屋との関係についての質問と回答が中心だが、当時の図書館の活動ぶりをうかがわせるものを二、三紹介すると、桐生市では「今年度から図書館専用の移動自動車購入、市内街頭貸出をする予定」とあり、八幡市では図書館の「ブックモビル」に対して貸本屋より生活権の侵害との抗議があったと報告されている。また高松市では、昭和二十八年より館外貸出を始めたものの、手続きが煩瑣、貸出は単行本のみ、開館時間という制約、新規購入が少ない、などの理由で、伸び悩んでいるという。

このように、いささか遅々たる歩みではあるけれども、不読書層の開拓・啓蒙という目標に向けて、一般市民の読書サークル活動を巡回文庫に代表される図書館側の活動が

支えるという形で、戦後日本の読書普及運動はそれなりの成果をあげていくことになる。

昭和三十年代も後半になると、「日本全国の街や職場に」結成され、活動している読書グループは、図書館に登録されているものだけでも九千団体二三名とも言われるようになるが（「すぐれた読書グループを発掘」『出版ニュース』昭和三十七年五月上旬号）、それらのグループの活動ぶりの一端を紹介してみよう。

「高崎市における読書会の実態調査」（高田教子、『社会教育』昭和三十六年四月）によれば、PTA、図書館、婦人会、青年団、文化団体等の何らかの公的機関に属しているグループだけでも市内に九六もあり、それらの創立は、昭和三十年前後にまで遡る。また「使用図書所属別」を見ると、PTA母親文庫所蔵図書を利用したり、図書館の団体貸出を利用したりしている。

『社会教育』昭和三十八年四月号は、いわば読書普及運動特集号だが、県立図書館↓町立図書館（又は公民館図書部）↓読書グループという巡回文庫方式が全国各地にあまねく行きわたっていることがうかがえる。ある県では、県立図書館の配本能力⇨供給力を補うために、市町村が自ら図書を購入して読書グループに配本してもいるという。さ

らに別の県では、巡回車の駐車場である配本所ごとに三〇
〜四〇のグループが存在し、配本日ごとにグループ員が集
まり、選書をおこなっており、そうした日々の活動の中か
ら、市町村立図書館が続々誕生しているというのである。

巡回図書館で借りた本はグループ内で回覧したうえで、
月一回の共同学習⇨読書会の場でその本を題材にして話し
合うわけだが、回覧の窮屈さから、「各主婦がこぞって本
を買うようになり、互いに本の交換もさかんになった」
（多賀義勝「主婦と生活の読書」『出版ニュース』昭和四十
年一月中・下旬号）というような事例も報告されている。

*

戦後日本の〈読書〉を牽引してきたもう一つの原動力で
ある貸本読書のほうは、遡れば江戸時代にまで辿り着くの
だからその歴史は相当なものだが、戦後の発生は、敗戦直
後からの「エロ雑誌」や「エロ味たっぷり」の読み物の氾濫
の受け皿としてであつたらしい（植原路郎「明治・大正・
昭和読書風俗物語十一」『出版ニュース』昭和三十七年八
月中旬号）。植原はここで現在では全国に一万軒以上と言っ
ているが、すでにこの時期は貸本屋は下火になっているの
である。

この一万という数字は「貸本屋 現状と見透し」（伴地

政夫、『日本古書通信』昭和三十一年一月）でも、この時
点で「全国ではおそらく一万を超えるのではないか」、「尚
これからもまだまだ増えて行くことでしょう」となってい
るが、「インフレの落し児か、現在のような未曾有の貸本
ブーム」は一時的現象だろうとも言っている。伴地はさら
に経営のコツとして、その土地の読者層の好みにマッチさ
せることと、「お客さんの本を読むスピードが早いので」
「スムーズに回転させて」行くことが重要で、本の種類
としては何といっても雑誌が中心であり、ついで子供の読
み物（マンガ、単行本）と剣豪ものとを重視している。

〔「実態調査」大衆文学の読まれ方―貸本屋の調査から―〕
（社会心理研究所、『文学』昭和三十二年十二月）は、全体
で十三ページにも及ぶ精細な調査報告だが、ここでは、全
国で二万五千軒以上、一店の登録読者が平均千人として、
総数で二千万人の国民が貸本屋を利用しているとする。
戦後、貸本屋が爆発的に増えたのは、昭和二十三年に神戸
で「確実な身元保証さえつけば一切の保証金がいらな
いという方法、つまり、一冊が低料金の読み貸だけで簡単に借
りられる方法」が採用されてからのことであり、この方式
が大阪、中国地方、九州、東海、横浜を経て、昭和二十八
年には東京にまで広まり、さらには「全国の農漁村」にま

で波及していったという。

同報告はさらに貸本屋側と利用者側のメリットとして、小資本でできることと、図書館利用の面倒さもなく、好きな時に大衆小説、大衆雑誌、漫画などを借りられることを挙げている。日本の場合は図書館の数が少ないことも貸本業を発達させた一因だが、図書館が発達したアメリカでも貸本は盛んであり、ここでは利用者はもっぱら図書館にはない探偵もの、スリラーもの、漫画本などを借りているのだという。この点で、「貸本屋の本が低俗化し、興味本位に走りがちなのを、いかにして防ぐか」は、日米に共通する課題とみているのである。

以下、同報告には、「営業の形態」、「営業時間」、「貸出法」、「貸出費」、「顧客数」、「一日の利用人数」、「一日の平均収入」、「貸本手持数とその構成」、「仕入れの方法と処分の仕方」、「貸本屋開業にあたって」、「どのような本が読まれているのか」、「読者側は貸本屋をどのように利用しているのか」、「好きな作家」、「返却までの日数」、「貸本屋を利用するようになった理由」、「一ヵ月あたりの貸本屋へ払う費用」、「最近一ヵ月間における本の購入状況」などの、詳細な面接結果が報告されており、そのなかでは「貸本屋の平均手持貸本構成」や「どのような本が読まれているのか」、

などが興味深いが、これらについては後でまとめて触れることとする。

貸本屋と図書館との関係はどうなっていたのだろうか。前掲のアンケート特集「貸本屋をどう見るか」（昭和三十一年）によれば、図書館の家庭文庫（利用者戸別訪問貸出）や「ブックモビル」方式が貸本業者を圧迫しないよう気を使ったり（前橋市、八幡市）、漫画や娯楽雑誌のたぐいは貸本屋に任せることで住み分けを図ったり（松本市）、図書館の利用と貸本屋の利用がむしろ互いの利用を促進する持ちつ持たれつの関係にあったり（富山県城端町）、貸本屋利用を卒業すると図書館利用に進んだり（市川市）、等々の例からもわかるように、総じて悲観的な関係にはない。むしろ、図書館の絶対数不足、蔵書不足、利用の不便、を補ってくれるパートナーとして貸本屋を位置づけ、そのレベル・アップに力を貸そう、というのが大方の図書館の姿勢であったのである。

同じ『図書館雑誌』昭和三十一年五月号に掲げられた都崎友雄の「貸本屋の現状と文化的意義——「貸本屋」から「街の図書館」へ——」にしても、「貸本屋が娯楽図書専門の町の私立図書館であってほしい」と説く西岡賛平の「子供読書の読書環境としての貸本屋」にしても、どちらも貸本屋の

レベル・アップを願っている点に変わりはない。

青木一良「貸本屋の利用者は図書館に移行するか」(『図書館雑誌』昭和三十一年六月号)は、図書館側が「貸本屋と図書館をつなぐ橋の役目を果たすもくろみで『友の会』をつくり、毎月四十円の会費で、レクリエーション向きの図書(娯楽本のこと―藤井注)を備付け、会員に貸出」という新津図書館の試みを紹介している。このように、煎じつめれば、大衆読者にふさわしい図書の内容・レベル問題と、利用の際の不便という問題との二つをめぐって、図書館・貸本屋論争は繰り広げられたのである。

*

ここで話を再び、吉川英治の『宮本武蔵』に戻すことにしよう。『読書世論調査』の結果を手掛かりとして、高度成長期が、名作文学と国民文学とが異常なまでに多くの支持を集めた時代であることを説いた「名作文学と国民文学―高度成長期の読書状況―」(『立教大学日本文学』二〇〇八年十二月)では、書物を①話題本、②実用本、③消閑本、④真摯本の四種に分けたうえで、『読書世論調査』中の「最近買った書籍」のランキング表、「一年間に読んだ書籍のうちよいと思ったもの」のランキング表、「好きな著者と好きな著書は」のランキング表」の三つを比べて、あと

になればなるほど「より本質的で有意義な読書体験をした本」、すなわち真摯本のみが厳選されて残ることを明らかにした。そしてそれらを、「友情」、「こころ」、「破戒」、「人間失格」、「次郎物語」などの名作文学と、「宮本武蔵」、「徳川家康」などの国民文学とに分けたわけだが、その真摯本グループの中にあっても、吉川英治と『宮本武蔵』の存在感は突出していた。

たとえば「好きな著者は」のランキング表では昭和二十四年から二十年以上にわたってほとんど一位に君臨しているし、「好きな著書は」が付け加えられた昭和三十年以降は『宮本武蔵』が代表作として遇され続けたことは言うまでもない。また「一年間に読んだ書籍のうちよいと思ったもの」のランキング表でも、『宮本武蔵』は昭和二十四年以降十五年間もの間、四位、三位、二位といったようなところを行ったり来たりしている。

『読書世論調査』で何年かに一度ずつ試みられる特別アンケートの結果を見ても、『宮本武蔵』の怪物ぶりは群を抜いている。昭和三十年に試みられた「この十年間のベストセラーのうちで読んだものがありますか」のランキングではトップであり、昭和三十二年の「繰り返し愛読している本は」のランキングでもトップ、昭和三十六年の「戦

後読んだ本のうちで一番よいと思ったのは」のランキングでは三位、という健闘ぶりである。要するに、『読書世論調査』の主役としての吉川英治であり、『宮本武蔵』であると言ってもさしつかえないほどだが、実は『宮本武蔵』のこうした突出ぶりを支えていたのが、すでに見てきた貸本屋であり読書サークルの活動だったのである。

前掲「大衆文学の読まれ方」（昭和三十三年）によれば、貸本屋の貸本構成は時代小説が三八%ともっとも多く、次いで漫画、現代小説となっている。「好きな作家は」のランキングでは時代小説家は山手樹一郎、吉川英治、柴田錬三郎の順なので、『宮本武蔵』もそれなりの位置にはあっただろうが、都内の貸本屋調査ということもあって、もともと都市部ではあまり強くない『宮本武蔵』がこの程度なのも無理はない。

金沢市内の貸本屋を調査した「貸本屋調査から―公共図書館と民衆を結ぶもの」（『図書館雑誌』昭和三十一年六月）では、吉川英治は山手樹一郎に次いで時代小説家の二位に、「多く読まれる本」のランキングでも『宮本武蔵』は五位くらいにつけている。吉川英治と山手樹一郎との併称は、田川市立図書館のアンケート回答（前掲「貸本屋をどう見るか」昭和三十一年）にも見られるが、その割に山手樹一

郎のほうが『読書世論調査』などになると影が薄いの、読者の間に山手作品を軽く見る、すなわち『読みすぎる』という消費的な意識（「大衆文学の読まれ方」）が働いているからだろう。

その意味では、前掲「貸本屋 現状と見透し」（昭和三十一年）が、同じ剣豪ものでも、「昔よく貸本で使われた、切つた、殺した、の三尺物といったものから、だんだん深味のある要するに内容の充実したもの、読んで何かあとに残るものがあるような本」に借り手の目が向かい出していると述べているのは、たとえば山手から吉川へ、などといった変化を念頭に置いているのかもしれない。

吉川英治や『宮本武蔵』が貸本の世界の雄であるのはある程度想像がつくが、もう一つの読書サークル活動の世界においても、『宮本武蔵』は引つ張りだこの人気者だった。貸本屋との住み分けという点からはやや奇異に思えるかもしれないが、「PTA文庫・自動車文庫等には大衆小説を相当購入している」（松本市立図書館、前掲「貸本屋をどう見るか」とあるし、巡回文庫の中身は「八割までが大衆小説」（中島俊教「読書を進めるための条件整備―特に社会教育活動との関連において―」『社会教育』昭和三十八年四月）と言われることもあったようだ。また、月平均

二、三十冊は購入する本をグループ内のアンケートによって決定すると、「時代小説が圧倒的」というような事例も報告されている（増田政雄「『一八会』と『やまみち』」同前）。

*

『宮本武蔵』が購入という形ではなく、より多く、借りて読まれるタイプの本であったことは、『読書世論調査』中のデータと突き合わせてみても、うなずける。『読書世論調査』には作品ごとに「読んだ方法」という質問項目があり、昭和二十六年まではそれが「自分で買った」、「家族のものを読んだ」、「知人から借りた」、「図書館で読んだ」、「その他」、「無回答」の六種に分類され、昭和二十七年以降は「買って読んだ」、「借りて読んだ」、「その他」、「無回答」の四種に、昭和三十三年以降は「買って読んだ」人数だけを明示するやり方に変わり、ついに昭和三十九年からそれぞれすらも無くなっている。そこに、買って当然、という時代の到来を見ることが出来るだろう。

具体例を見てみよう。昭和二十五年の場合、『宮本武蔵』を「ためになったと思った」六七人中「自分で買った」のは二二人、これに対して同じ『宮本武蔵』を「面白かったと思った」一四六人中「自分で買った」のは二八人に過ぎ

なかった。どちらも購入者が少ないのが目立つが、『読書世論調査』の講評は「面白いほうでは買った割合が減っている」ことに注目している。同じ本でも、面白い≠娯楽的と見る人々は、買うより借りる、なのだろうか。それ以後も、『宮本武蔵』は購入されることの少ない本で、昭和二十八年には「よい」と思った七八人中購入したのは一四人のみ、昭和三十二年には二五人中、九人、昭和三十五年には二二人中、八人、となっている。もっとも、これが昭和三十八年になると、四〇人中、一七人と上向いてくるのだが。「読んだ方法」の項目とは別に、昭和二十九年からは前述の「最近買った書籍」のランキング表も登場してくるのだが、ここでも『宮本武蔵』はまったく振るわない。昭和二十九年と三十年に一六位と一三位に登場したのみで、以後は三〇位以下に沈み、再び浮上してくるのは昭和三十七年の六位まで待たなくてはならないのである。

ここで、この論の冒頭で述べた昭和三十五年前後の、コンパクトな廉価版から大判の豪華版へ、という屈折現象を想起してみよう。『読書世論調査』で、『宮本武蔵』を購入する読者の割合が増加に転じ、「最近買った書籍」のランキング表で六位、四位、十一位を記録するのが、ちょうどこの頃のことであった。そのことは、『宮本武蔵』の読書

が、コンパクトな廉価版を貸本屋や読書サークルから借りる段階から、大判の豪華版をささやかながらも応接間もどきの空間に置くようになった段階へと進んだことを、意味していたのではないだろうか。

すでに見たように、中央公論社と講談社の大判の豪華版が何年も続けて重版されたこともそれらの変化を雄弁に裏付けており、他方では、貸本時代に重宝されたコンパクトな廉価版が、昭和三十二年に言わば最後の貸本用として印刷されてから十年以上も重版されることがなかったことも、逆の側からこれを裏付けている。

「名作文学と国民文学―高度成長期の読書状況―」で挙げた真摯本たち、すなわち名作文学と国民文学も、どういう形で読まれたかを見れば、「こころ」や「人間失格」が主として文庫本で読まれたのに対して、「赤と黒」、「罪と罰」、「風と共に去りぬ」、「戦争と平和」などは文学全集で読まれた名作たちだった。それに対して全盛期の『宮本武蔵』は、文庫本でも文学全集でもなく、もっぱら貸本という形で読まれた。それが、高度経済成長の進展によって人々の生活が少しづつではあるけれども豊かになるとともに、『宮本武蔵』の貸本享受時代も、ようやく終わりを告げることになったのである。